

学苑 第八八一号 二五三二 (二〇一四・三)

『蠟人形』の検討 V

猪熊雄治

前稿⁽¹⁾では、昭和十三年から十五年前半までの『蠟人形』を対象に、この時期編集を担当していた加藤憲治の詩観が反映された誌面構成が展開されるとともに、同時代の詩壇動向を様々な視点から論じる詩誌としての性格も強化されていく経路を確認した。その続稿となる小論では、編集担当が加藤から大島博光に交代した十五年五月号頃から十六年十二月号の頃までの誌面に視線を向け、『蠟人形』の動向を確認していきたい。

I

十五年五月号からの大島の編集担当については、同号の「編輯後記」でその経緯が語られている。十三年以降出身地の長野で療養生活を送っていた大島が、詩人懇話会主催の「日本詩の夕」出席のために上京し、その後恩師吉江喬松の死去や、西條八十の長女嫩子の婚礼もあり、帰郷を延期していたところ、多忙な加藤との交代を西條から要請されたこととされ、大島は急遽加藤から編集を引き継ぐこととなった。「編輯後記」では、慌ただしい交代の事情説明とともに大島の不安や戸惑いも述べられているが、後半部分には大島が想定する『蠟人形』の方向も提示され、『蠟人形』の「公器的詩誌」性の強化が打ち出されている。さらにその具体例として「とく

に隠れてゐる優れた詩才を発見することを本誌の使命ともしたい。」との意向が述べられるように、急な交代ではあったものの、大島は編集への意欲的な姿勢も示していた。

大島が語った「優れた詩才」の「発見」は、自己の周辺にいた詩人の起用によって試みられている。五月号の菱山修三、奈切哲夫を始めに、六月号には高橋玄一郎、壺井繁治、山田岩三郎、松本隆晴、野田宇太郎の初掲載があるように、大島の編集する『蠟人形』には初めて寄稿する詩人が相次いで出現していくが、そのメンバーには菱山、壺井のような中堅詩人とともに、大島が接触していた新進の詩人が多く含まれていた。例えば十五年の誌面で七月号以降に初寄稿した主な詩人等を見れば、中野秀人、石井健次郎、田中敏子、竜野咲人、東郷克郎、小山田輝彦、大山定一（七月号）、大江満雄、石中象治、吉田一穂、平野威馬雄、西山克太郎、泉潤三、菊島常二、殿岡辰雄、鮎川信夫（八月号）、山中散生、平田内蔵吉、永瀬清子、浅井俊吉、高橋義孝（九月号）、伊藤信吉、曾根崎保太郎（十月号）、岡田芳彦、上田敏雄（十一月号）、滝口武士、木下夕爾（十二月号）となるが、その半数以上を新進詩人が占め、ほとんどが大島の周辺にいた詩人でもあった。その中には松本、鮎川のように、それまでに『蠟人形』への投稿作

品が掲載され、厳密に言えば初掲載とはいえない詩人も含まれ、また泉、菊島、鮎川のように初寄稿のみでその後の掲載のなかった者もいるが、この時期新たに誌面に登場した新進詩人の多くは、その後も寄稿し、さらに掲載を重ね『蠟人形』を支える執筆メンバーともなっていく詩人も見受けられる。

新進詩人の詩面への登場については、二つの交友圏からの起用が考慮されたのではないか。その一つが長野在住の詩人達であり、六月号に登場した高橋玄一郎がまずあげられる。高橋を発行者に、八月号に初登場する泉を編集者として刊行された『信州詩人詞華集』（信州詩人協会刊 14・2）、さらに高橋が編集発行人となった詩誌『信州モンパルナス』（信州詩人協会刊 15・5 創刊号のみで終刊）には大島の寄稿もあり、高橋は大島が注目していた詩人でもあった。初掲載となった「詩的体系について」が載った六月号の「編輯後記」末尾で、大島は「…高橋玄一郎氏なども、信州の浅間温泉にかくれて、しづかに詩人の運命を凝視してゐるひとである。これからは、かういふひとにこそおほいに語り歌ってもらはねばならぬ。」と「隠れてゐる優れた詩才」高橋の紹介とその後の掲載への期待を語り、高橋の寄稿を歓迎する姿勢を示したが、この期待通り、十五年の号では八月号「首都死守」、十一月号「詩人の出陣」と掲載が続けられる。公器的詩誌への寄稿が少なかった高橋の重なる掲載については、注目されていたように、十二月号の近藤東「昭和十五年度詩壇の回顧」では、「高橋玄一郎氏は隠れたる、鋭角的詩論家であるが、本誌が氏を優遇してゐることは正しい。」との言及がなされ、高橋起用が高く評価されている。

高橋、泉以外の長野在住の詩人では、七月号初登場の竜野が主宰していた詩誌『星林』（8・9・15・12）から竜野、松本、石井、田中、西山、浅

井の六名が『蠟人形』に登場している。この中の松本とは特に親しい交流がなされていたように、松本柳星名での投稿（十三年五月号「詩」九月号「小曲」）を契機に交友を始め、『新領土』への加入や『信州詩人詞華集』への寄稿も大島が紹介したとされる。こうした松本との交流を含め、西山の発言によれば「長野におった頃は、我々は彼に刺激された。」と回想されるような『星林』同人との親交が長野では重ねられ、竜野については「この詩人はほのかな韻律を捉へ香りを歌はうとし、純粹な詩の息吹きを聴かうとしてゐる。」（「詩壇時評」『文芸汎論』十五年二月号）と他誌で紹介もしていた。このような『星林』同人との交流と評価から寄稿者として迎え入れた大島の措置は功を奏し、『星林』終刊後、起用された『星林』同人のうち、浅井はその後一篇のみの寄稿で終わったものの、他の五名は自作の発表誌として『蠟人形』への寄稿を続け、特に松本、竜野、石井の三名は、ほぼ休刊時まで作品を寄稿し続けるような有力な寄稿者となっていく。

今一つ新進詩人の起用として、大島は自己も所属し松本も加入していた『新領土』の同人を想定していた。松本を除き、新寄稿者のうち、奈切、東郷、小山田、菊島、鮎川、曾根崎、岡田が『新領土』の同人であり、さらに『新領土』の終刊（16・5）までの間に、今田久（十六年一月号）、服部伸六（同二月号）、志村辰夫（同五月号）と『新領土』から『蠟人形』の新寄稿者が続出している。特にこの中では一番早い寄稿者であった奈切の活動が注目される。十五年の号だけを見ても、五月号の「生命ある種子」に続き、「智慧と芸術」（八月号）、「生ける日々」（十一月号）、「詩壇時評」（十二月号）と掲載を重ね、詩とともに『蠟人形』では批評面で力を発揮し、『蠟人形』終刊までの掲載数では、『新領土』からの新寄稿者の中では群を抜いて多い常連執筆者となっていくが、奈切の起用にも高橋同様、大島の

期待が込められていたのであろう。

II

前稿でも述べた通り、十三年以降『蠟人形』の誌面にも戦時色が次第に浸透し、投稿ジャンルに戦時歌謡が新設され、民族的意識を強調する批評も登場するようになっていた。一方で、ナショナリズムに依拠した詩論を批判する論も掲載され、大島も十四年三月号の『《日本的》をめぐって』では、「偏狭な復古主義による『日本的』なるもの」に対して、芭蕉を例に「あらゆる人間精神と人間意識に深く共同であるやうな世界的な芸術」を創造する「ポエジイ」の価値を主張し、詩壇に見られる時局色の濃い論調への疑問を語っていた。このような大島の姿勢をさらにまとめた論として、竜野を紹介した「詩壇時評」の連載（十五年一月～三月号）があり、ここでの指摘が新たな寄稿者の起用や『蠟人形』編集の方向に繋がったと思われる。

一月号の「詩壇時評」では、まず詩壇で論じられてきた「詩における日本的性格」をテーマに採り上げ、折戸彫夫「日本文化の特質と詩の行方（一）（二）」（『日本詩壇』十四年五月号、七月号）と岡本彌太「東洋詩難考」（『日本詩壇』十四年五月号、七月号、九月号）の紹介を通して、「日本をも含めての東洋の詩精神」が「近代詩精神へ連るもの」であることを提起し、さらに「洋の東西を問はず、時代の如何を問はず、詩と呼ばれるもの」の中に「存続してきた人間精神の——人間意識の共通性の存在」を指摘していく。『《日本的》をめぐって』同様、「詩における日本的性格」の問題を、詩壇に見られる「偏狭な意味に用ひられた『日本』といふ排他的限定」（『《日本的》をめぐって』）からではなく、詩の普遍的価値にその可能性を見出そ

うとするこの視点は、民族主義に傾斜した詩論への批評として、この時期の大島が示していた詩観でもあった。翌十六年九月号「俳句と詩と」でも「…俳句芸術を通じて、あらゆる人間における人間意識あるひは精神活動の共通性または共同性を見る…この人間意識の共通性こそあらゆる芸術が成立する隠された第一条件である。」と繰り返されるが、このような「人間意識の共通性」を指定する姿勢が、『蠟人形』で奈切が重ねて批評を掲載する背景にあったのではないか。奈切も芸術評価の基準に普遍性を追求していた点で、大島の視点と通底する発想を示していた。

『蠟人形』での最初の批評掲載となった「智慧と芸術」で、奈切は大島の「ポエジイ」と重なるような理念として、「智慧」を打ち出している。「智慧と芸術」以前の「智慧の貧困（詩壇時評）」（『新領土』15・1）で提唱されていた「智慧」は、「単に表面を走るだけの詩」に対して、「智慧」が生み出す「自ら思索してゐる詩」に詩の方向を求めたように、奈切の批評原理の基軸となるもので、「智慧と芸術」は「…人間それ自体、人間そのものゝ本質に根を下」ろす「智慧」の重要性をさらに主張した論でもあった。こうした普遍的な精神性を求める姿勢が、大島の期待ともなったのか、「智慧と芸術」以後、十二月号から翌十六年八月号まで計七回の時評が掲載される。これらの時評では「自らへの強力な闘ひ乃至思索と、探究」による「哲学的深さ」の獲得と、「人類を縦横に貫いて流れてゐる地下水」にまで達する「深い智慧ある詩」の創造を期待（十六年六月号）する「智慧と芸術」の視点からの発言が繰り返され、同時代の「…主張すべき思想性乃至は論理にのみ終始し、真の芸術性を忘却したり軽視し勝な」（同号）傾向もあわせて指摘されている。「単なるスローガンの韻文化、単なる指令の散文詩化、などは、詩と詩人とは何らの関係もないのである。」

〔編輯者の手帳〕十六年四月号〕という大島の懸念と問題意識を共有する形で、奈切は「智慧」に基づく批評を展開していったのであろう。

大島が編集を担当して以降、海外詩の記事が拡充されるのも、やはり「人間意識の共通性」を詩に求める姿勢の現れではないか。秋野さち子によれば、大島は「フランス文学をはじめ外国文学を主流に採り上げようとしたんだ。だから、ヘルダーリン：ランボー、エリュアール、アラゴン、バレリー、リルケなどを取り上げるようにした」と語ったとされるが、確かに詩面での海外詩人の作品紹介や批評の掲載は増加している。例えば十五年三月、四月号では、海外詩関連の記事はそれぞれ翻訳詩一篇だったのに対し、六月号では、マラルメ、ヴァレリーの訳詞と上田保訳のオーデン「詩人の本質」、笹沢美明「リルケとヴァーリイ」の四篇が、七月号でもヴェルレーヌ、ヴァレリー、ゲオルグの他、大山定一「リルケの詩について」の四篇が載るが、オーデンの詩論やリルケの作品や批評が連続して掲載されたように、掲載数が増えるとともに、登場する海外詩人の幅も広がりをを見せていた。オーデンの詩論掲載に示された方向は、その後もやはり上田訳によるエリオット（八月号）、E・ウィルスン（十一月号）と続けられたものの、十五年の号で上田訳の詩論掲載が終わる一方、六月号七月号と続くリルケ関係の掲載は、八月号の笹沢の訳詩、十月号の石中象治「リルケとカロッサとの出会」、十一月号の古賀剛「詩人の義務について」、十二月号の大山の詩訳と続き、十六年にも高橋義孝「ライナー・マリア・リルケ」（四月号）、石中「ドイツの象徴詩人」（八月号）のように継続されている。高橋、石中にはそれぞれ「カロッサの詩風」（十六年五月号）、「カロッサについて」（十五年八月号）もあり、『蠟人形』では新寄稿者である大山、石中、高橋を中心としてリルケ、カロッサの紹介が進められていたともいえる。

る。リルケ、カロッサの他にも、ドイツ詩人では大島が言及した通り、十六年にはヘルダーリンが複数回紹介されている。

ヴェルレーヌ、ヴァレリー以外のフランス詩についても、十五年の誌面では、翌年にも継続されるエリュアールの訳を始めとして、大島のランボー、仏訳のヘルダーリンやティボーデ、バシュラールの詩論の紹介があり、十六年も大島訳のエリュアールやランボー伝の他に、ヴァレリー、ランボーの訳詩、新庄嘉章訳によるボードレール評伝の連載等、フランス詩を中心とする海外詩の記事は十五年同様、充実が図られている。ただし高橋「現代ドイツの詩人について」（十五年十二月号）を始め、「ナチス詩抄」（十六年一月号）での作品紹介や、阪本越郎「ナチスの詩人について」（同号）、高橋「シュテファン・ゲオルゲ」（三月号）のように、民族主義的な視点からのドイツ詩評価も誌面には現われ、こうした傾向への意識も働いていたのか、先に引用した「単なるスローガンの韻文化、単なる指令の散文詩化、などは、詩と詩人とは何らの関係もないのである。」の主張も提出されている。「編輯者の手帳」では、芭蕉、ネルヴァル、ランボー、リルケ、ゲオルゲ、ヘッセ、ノヴァーリスを例に「ひとびとのところを豊かにし、ひとびとの精神に翼を与へ、かくて靈感を与へるものこそ詩人である。」と詩人の営為が強調された後、結論部分にこの主張が述べられるが、大島の詩観とともに海外詩関係の誌面が増加された背景を語った小文となっている。

『文芸汎論』の「詩壇時評」（十五年二月号）では、「詩の批評、詩人論の少なさ」も指摘されていた。この「少なさ」の問題視も、作品に「存続してきた人間精神」を見る詩観から派生された提起であり、ここでも同時代の詩壇状況に対する大島の厳しい視線を通して、「詩の批評、詩人論」が

必要とされる事情が語られている。大島によれば「…詩の価値を発見し生産する批評もなく、ただ乏しい多数の低い評価に」委ねているため、同時代の詩人は「悪しき孤独のなかで独語のごとき地方語」を語るものであり、こうした「人間精神が希薄となり、はては不在」となる現状を打開するために、「今は不毛な詩の表皮についての十の詩論よりは、詩の肉体についての豊饒な一つの批評評論が必要とき」との認識が示される。詩批評が「貧困をきはめてゐる」状況とその弊害を語り、批評の活性化を期待したこの提起が、奈切に加え、高橋や伊藤信吉の起用にも反映されたのである。

先述の通り、高橋の詩論掲載は「詩的体系について」から始まるが、この論は「文学の方法である詩的定型が歴史的な形成作用として、詩史的自然的に形成される」「詩史的法則性」を基軸に、今後の方向が示唆されるように、高橋の詩史観から打ち出された詩論となっている。詩の歴史的展望は、高橋が継続的に取り組んできたテーマであり、「詩的体系について」以前には、『リアン』（4・3・12・6）でも同人であった竹中久七、藤田三郎との共著で『啓蒙日本詩史』（未公刊）⁽⁷⁾がまとめられ、「回想のマラルメ」（『日本詩壇』十三年五月号）、「定型考序説」（『日本詩壇』十三年七月号）でも、マラルメの詩史的位置や、古代から近代詩までの「定型構成の方法」が論じられてきた。「詩的体系について」はこうした論考の延長上に位置した論で、続く「詩人の出陣」（十一月号）では詩史的展望を踏まえ、過渡期にいる詩人のあるべき姿が想定されている。翌十六年の号でも、新たな「詩的定型」の創造を求めた「定型私議」（一月号）、竹中の詩集『中世紀』⁽⁸⁾を素材に「詩的文化」が構築されていく過程を確認する「詩的文化」（三月号）と、詩論の掲載が続き、高橋の詩史観から抽出された詩の進路

が提起されていく。十六年三月に高橋は『現代日本詩史』⁽⁹⁾を刊行し自己の詩史観を集成するが、『蠟人形』で掲載された詩論には、歴史的展望とともに詩の進路や詩人の姿勢への言及も含まれ、「生産」的な批評を待望していた大島の期待に応えたものだったと思われる。高橋の詩論掲載は「詩的文化」までで、以後は四月号のアンケート回答の他、「梅雨の窓」（七月号）、「白く暈どり」（八月号）、「山湖の襖」（十二月号）と、日米開戦直後の治安維持法違反容疑での検挙により、高橋の寄稿が停止するまで、詩とエッセイの掲載が続いていた。

高橋同様、大島が編集を担当した後に、初めて誌面に登場した伊藤も、掲載を重ねた批評家となっている。「詩壇時評」二月号では「詩の肉体」に「触れる」詩論の好例として、伊藤の「中原中也論」（『文学界』十四年十二月号）を評価し、さらに大島が編集を担当し始めた直後に『現代詩人論』⁽¹⁰⁾を刊行していたため、大島の注目も高かったであろう。初掲載となった十五年十月号の「覚書（現代詩に就て）」は、同時代詩にうかがえる「リアリズムの主張による『事実』だけの展開」、「リリズムの擁護をもつてする古典への回帰」の二傾向を退け、現代詩の方向を「意識されたリアリズムの犠牲による、新しい抒情の陶冶」に求めた論で、現代詩の進路についての丁寧な考察が展開されている。その後も十六年の号では古代歌謡を論じた「郷愁の詩篇」（三月号）、「詩人の生命」を「主観的真実」に求める「詩人の運命」（六月号）、詩人と言語の問題を取り上げた「発想と創造（上）（下）」（十一月・十二月号）と寄稿が続き、この他にも十五年十二月号と十六年二月号の「新刊詩集評」にそれぞれ「緑川昇『稗子抄』小感」、「草野心平詩集『絶景』断片」を載せ、その他十六年四月号のアンケート回答もるように、『蠟人形』の詩批評を支える寄稿者でもあった。

十五年五月号から十六年十二月号までの誌面では、詩論や批評の記事で高橋、伊藤、奈切以外の新寄稿者も活発な活動を展開している。この間エッセイ的なものを含め詩論等を重ねて掲載した執筆者として、奈切、高橋義孝、石中、高橋玄一郎、伊藤の他、日夏耿之介、山本和夫、横山青娥、春山行夫、安藤一郎、岡本潤、佐藤一英、長田恒雄、永田助太郎、阪本越郎、菊岡久利、山田岩三郎、古賀剛、大江満雄、平野威馬雄、吉田一穂、平田内蔵吉、上田敏雄、穴戸儀一があげられるが、このうち、山田以下の執筆者が『蠟人形』への新寄稿者であり、新たな詩人の起用から詩批評の活性化を期待した大島の姿勢があらためて確認できる。新寄稿者の掲載作には、大江「詩の絶壁」(十五年八月号)、上田の「リアリティのランプ」(十五年十一月号)のように、自己の詩学を詩論風エッセイで語った作品が見られるとともに、山田の「歴史の過酷性と詩人の位置」(十五年十二月号)のような、同時代の詩壇状況を踏まえた批評性の高い詩論も発表されている。山田は大島が「詩壇時評」を連載する少し前に『日本詩壇』に「詩壇時評」を三回連載(十四年九月～十一月号)し、芸術論的な視点から詩壇の動向を概観していたが、おそらくこうした批評姿勢への大島の注目が、『蠟人形』での起用となったのではないか。その後の「批評の確立」(十六年三月号)でも自己の詩観を踏まえた方向が模索され、高橋、伊藤同様、大島が求めている単なる「片々たる詩人攻撃や詩集紹介」ではない批評が山田にも期待されていたのであろう。

III

これまで見てきた通り、十五年五月号からの『蠟人形』の誌面には、大島が「詩壇時評」で提起した方向が反映されていた。さらに海外詩記事の

拡充や詩論掲載に現われたこの方向を、新しい寄稿者を中心に進めていったことが、十五年五月号以降の『蠟人形』にうかがえる傾向ともなっていた。加えて掲載される詩についても新寄稿者からの作品が多く見られ、巻頭に著名な詩人の作品やエッセイを載せる等の全体的な誌面構成に変化はないものの、巻頭以降投稿欄までの中間部分には新寄稿者の作品を載せる形で、大島は『蠟人形』に新しい方向を与えていったといえる。こうした大島の試みについては、村野四郎の『蠟人形』は大島博光氏の努力によつてその色彩を単一純化⁽¹¹⁾しとの評価が得られた反面、小林英俊の回想に「そして大島氏の編輯になつてから初心者には苦手であつたと思ふがグンと程度が高調され純詩誌として重視されるやうになつて⁽¹²⁾」とあるように、以前から『蠟人形』に関係していた者にとっては、専門性の高い「純詩誌」へ傾斜したとの印象も与えていた。確かに小林が回想するように、大島の「ポエジイ」重視の詩観からの編集は、『蠟人形』の投稿詩誌としての性格を希薄にし、専門的な詩誌性を強化したと思われる。

一方で大島が編集を担当していく十五年五月以降は、戦時色が一層強化される時期でもあり、『蠟人形』の誌面構成にも徐々に時代性が現われていく。十五年の号では、長田恒雄の「新体制と詩人」(十一月号)のように、政治情勢を踏まえた論の掲載は少ないものの、十六年の号では時局を強く意識した記事がたびたび掲載されるようになり、四月号のアンケートには「第一問『新体制に処する詩人の覚悟』があり、丸山薫を始めとする三十名の詩人が回答を寄せている。同号には田村昌由「現代青年詩人の動き」も載り、国策に沿った詩人団体の情報が提供されるが、長田「文化翼賛としての詩人団体とその動き」(七月号)でも、団体紹介と「詩人の翼賛の使命」が語られている。以後も浅見勝治「詩人と翼賛」(九月号)、長田

「詩人と翼賛」(十月号)、山本和夫「戦場と詩人」、蔵原伸二郎「民族的優越感」(十一月号)と掲載が続き、浅見論のような「…八紘一宇の国家目的を翼賛する覚悟を持つなら…」、「詩人の銃後運動の強化」といった論調も誌面に展開されていた。

大島が「ポエジイ」重視の方向を、浅見の発言に現われた時代動向と重ねるような形で再三発言するのも、大島が時代の重圧を強く意識していたためではないか。例えば、十五年八月号「編輯後記」では、「…民族の歌声は連綿たる二六〇〇年に亙る民族文化のなからひびいてくる歌声であると同時に、常に若き民族のもつ若き未来への出発と飛躍の歌声でなければならぬ。…新しき日本詩の将来を約束するものでなければならぬ。」と時局への言及から詩の方向が語られ、十六年十一月号「編輯者の手帳」でも「…われわれの日本が、かかる建設の闘ひの偉大なる旗手であることを…自覚すると同時にその責任の大きいことを知らねばならぬ。…今日の偉大なる瞬間を永遠に残すモニュメンタルな芸術創造こそ芸術家の義務である。」といった時勢を踏まえた詩人像が述べられる。十五年五月号の誌面から試みられた「ポエジイ」重視の方向は、時勢の圧迫の中で模索する困難さも伴っていたのであろう。

注(1) 『蠟人形』の検討 IV 『学苑』平成二十五年一月号)

(2) 腰原哲郎「高橋玄一郎年譜」『季刊地域と創造』第9号 1979年5月)

(3) 大島博光記念館HP「詩誌『信州モンパルナス』目次」(http://oshima-hakou.blog44.fc2.com/blog-entry-1961.html)

(4) 松本隆晴「思い出の日々 懐かしい人々(5)」(「信濃毎日新聞」昭和五十一年一月二十一日)

松本隆晴「暗い季節の思い出」(「信濃毎日新聞」昭和五十一年十一月二十五日『曆象』83集 昭和五十一年十二月・柳沢さつき)

(5) 西山克太郎・森山仲治・岡沢光忠「北信詩壇を語る―北信地方詩史一覽―」(かおすの会編『信州詩壇回顧』1963年1月『かおすの会』)

(6) 秋野さち子・新川和江「対談『蠟人形』の頃」(『文学館』4号 1984年4月)

(7) 高橋玄一郎・竹中久七・藤田三郎『啓蒙日本詩史』(昭和十三年七月リオン社)

(8) 竹中久七『中世紀』(昭和二年十二月 詩之家出版部)

(9) 高橋玄一郎『現代日本詩史』(昭和十六年二月 山雅房)

(10) 伊藤信吉『現代詩人論』(昭和十五年七月 河出書房)

(11) 村野四郎「悲壮なる決算―昭和十六年度詩集詩誌について―」(『文芸汎論』昭和十六年十二月号)

(12) 小林英俊「蠟人形の回想」(『蠟人形』昭和二十一年六月号)

資料調査では、日本近代文学館、神奈川近代文学館、大島博光記念館、大島博光記念館長大島朋光氏、信州大学附属図書館、本学図書館近代文庫のお世話を頂いた。また『現代詩1920―1944―モダンイズム詩誌作品要覧―』(和田博文監修 二〇〇六年十月 日外アソシエーツ)並びに『現代詩誌総覧⑤―都市モダンイズムの光と影Ⅰ』(現代詩誌総覧 編集委員会編 一九九八年一月 同右)、『現代詩誌総覧⑥―都市モダンイズムの光と影Ⅱ』(現代詩誌総覧 編集委員会編 一九九八年七月 同右)、『現代詩誌総覧⑦―十五年戦争下の詩学』(現代詩誌総覧 編集委員会編 一九九八年十二月 同右)を活用させて頂いた。併せて御礼申し上げます。

(いのくま ゆうじ 日本語日本文学科)